

桂

孝二 著

啄木短歌の研究

桜

楓

社

かつら こうじ
桂 孝二

明治45年2月25日生，昭和11年京都帝国大学文学部卒，現在香川大学名誉教授。四国女子大学教授。

専攻 和歌史，近代短歌。

現住所 高松市仏生山町乙69—53。

国語国文学研究叢書 19

啄木短歌の研究

昭和四十三年六月五日 初版発行
昭和五十一年十一月二十日 新版発行

著 者 桂 孝 二

発 行 者 及 川 篤 二

印 刷 所 相 馬 印 刷

株 式 会 社 桜 楓 社

101 東京都千代田区猿樂町二一八—三
電 話 (〇三) 二九一—五六六一
振 替 東 京 六一—八〇二〇

啄木短歌の研究 目次

『一握の砂』私論……………七

はじめに……………八

一、「暇ナ時」時代の啄木短歌……………二三

二、「暇ナ時後期」の啄木短歌……………三六

三、『一握の砂』歌風の成立——「仕事の後」時代——……………四三

四、「大逆事件」時代の啄木短歌……………五三

五、『一握の砂』初出歌について……………六六

「心の姿の研究」から「呼子と口笛」へ……………七三

はじめに……………七四

一、「食ふべき詩」と「心の姿の研究」……………七五

二、雑誌「樹木と果実」計画前後……………八〇

三、「呼子と口笛」Ⅰ……………八九

四、「呼子と口笛」Ⅱ……………九六

『悲しき玩具』小見	二三
短歌三行書きについて——哀果と啄木——	二五
はじめに	二六
一、土岐哀果——その三行書きと「NAKIWARAI」について——	二八
二、石川啄木——その三行書きの経過——	二五
喚体歌について——啄木短歌の一特色——	二七
啄木短歌とその類歌	二〇一
はじめに	二〇一
一、『一握の砂』の類歌	二〇五
二、『手套を脱ぐ手』に関連して——啄木からアララギへ——	二二一
三、『悲しき玩具』の類歌について	二三五
四、歌集外の歌の類歌について	二四〇
啄木と鉄幹	二五九

はじめに	二四〇
一、透谷とのかかわり	二四一
二、鉄幹についての評二、三	二五〇
三、白秋の鉄幹模倣	二五八
四、指導者意識	二六五
五、劣等感	二七〇
六、鉄幹の反骨	二七四
七、伊藤博文悼歌	二八一
八、鉄幹の短歌二、三	二八七
啄木初期短歌抄	二九三
後記	三三

啄木短歌の研究

『一握の砂』私論

はじめに

石川啄木は、明治四一年六月から同四三年一月までの作歌千五百数十首の中から五五一首を選んで、歌集『一握の砂』を編集した。したがって、歌集以前を初期時代と呼ぶべきに対し、この時期を『一握の砂』時代と名づけるとよいわけであるが、私はこの『一握の砂』に含まれた時期を二期に分つべきだと考えている。それは、明治四二年五月の「スバル」一ノ五に「莫復問」六九首を発表して以来、翌年三月まで約一〇か月間、啄木は短歌を作っていない。つまり空白時代があるという点と、その空白時代の前後でその歌風にかなりの変化が見られるという点からである。この空白期について啄木自身も、明治四四年の日記に前年の回顧として「前年（四十三）中重要記事」を記しているが、その四月の項に「この頃朝日紙上および東京毎日新聞に作歌を発表す。蓋し前年初夏以後初めての作なり。社中の評判可し。」と書いているのである。しかし、実は、明治四二年一月四日の「東京朝日」に「読人不知」の名で「十一月四日の歌」九首と、そのころ、啄木の名で「岩手日報」に発表していた「百回通信」の第一八回目を、同一一月五日に発表しているが、その中に悼歌五首があり、「朝日」のものと重出が三首ある。いずれも伊藤博文葬送の日の歌である。この計一一首が、啄木作歌空白期の中にあるが、右の啄木自身の言もあり、孤立的なものとして、右の一〇か月を空白期とするのである。渡辺順三氏が「四十一年の作から『一握の砂』に採録したものは非常に少なく、四十三年

註¹

のものは雑誌に発表したものは殆んど全部採っている。ここで考えられることは、四十二年を境にして彼の短歌観、ひいては文学思想の上にいちじるしい変化があったことが察しられるのである。『現代短歌大系』第十卷解説』と言われ、石川正雄氏が「明治四十二年後半以後はかれ独自の歌境が形づくられたところで、歌会などに出席することもなく、いわゆる生活歌人として独立して新聞雑誌に発表した。」（『定本石川啄木全歌集』）と言っているのは、いずれもこの空白期に気づかれず、あるいは大まかに過ぎ、あるいは誤っているのである。

そして、私は、啄木が北海道より上京して小説に専念したが、一向に売れず、半ばすて鉢の気持で作り始めた短歌の稿本『暇ナ時』（六月一四日より一〇月一四日まで、六五一首）と、それと時期がある程度重なっている『明治四十一年作歌ノート』（八月八日より一月二六日まで、三七三首）との時期を『暇ナ時』時代と考え、『明治四十二年作歌手帳』（明治四十二年一月九日より四月一日まで、五七首）の時期を、歌風に変化が見えるので、『暇ナ時後期』時代と考えよう。この時期には、右の手帳の歌に収められていない「スバル」二月号五月号の歌等が加えられる。また、空白期以後、明治四三年三月より六月までを『仕事の後』時代とする。同年四月に歌集『仕事の後』を編集、出版しようとして成らなかったことによる。この時期からを、私は『一握の砂』歌風と見ている。啄木は六月一八日の朝日新聞発表歌のうち、約一か月の作歌空白期があったようで、七月一五日から『明治四十三年歌稿ノート』（一〇月一三日まで）を記しはじめている。この時期を『大逆事件』時代と名づけよう。この時期の後に、歌集『一握の砂』編

集期（一〇月四日、四月に編集した『仕事の後』につきつぎと増補した歌集稿本が東雲堂より出版される事がきまり、一〇月九日には書名を『一握の砂』とすること、歌を削除増補することを西村陽吉に手紙している。）がくる。『一握の砂』初出のかんりの作はこの期に作られたものであろう。以上をまとめるとつぎのようになるわけである。

『一握の砂』時代区分

(一) 前期（『暇ナ時』歌風）

(1) 『暇ナ時』時代（明41・6～41・11）

(2) 『暇ナ時後期』時代（明42・1～42・4）

(二) 空白期（博文葬送歌二一首）

(三) 後期（『一握の砂』歌風）

(1) 『仕事の後』時代（明43・3～43・6）

(2) 『大逆事件』時代（明43・7～43・10）

『一握の砂』を編集する時、啄木はこの「暇ナ時」および「同後期」の作歌約一千首から九四首を選び入れたに^{注2}対し、「仕事の後」「大逆事件」時代の四四二首から三二八首を『一握の砂』に採録している。^{注3}この事から『一握の砂』の考察はその後期を主とせねばならぬと思われるが、この前期を明らかにすることにより、そこから後期へ、これが真の『一握の砂』歌風であるが、そこへどう進展したかを明らかにし得るのでないかと私は考えるのである。

以下、本書では『一握の砂』の短歌を引用するのに際し、番号を付け、特別の場合以外は、その三行書きを一行書きとし、歌集より引用の場合は行かえの部分に一字空白をおく。したがって、番号のない歌は『一握の砂』に収められていないもので、歌稿ノートや、雑誌等にのみ見える作である。なお、『一握の砂』に採録されている歌も、いない歌も、歌末に、作歌年月日や初発表誌名等を記しておく。その場合、『一握の砂』と表現や表記に小異あるものも参考のため番号を記しておく。つまり番号がついていても、一字空白がない場合は歌稿ノート・雑誌発表よりの引用である。

『一握の砂』に

- 25 なみだなみだ 不思議なるかな それをもて洗へば心戯けたくなれり
- 69 朝はやく 婚期を過ぎし妹の 恋文めける文を読めりけり
- 80 浅草の凌雲閣のいただきに 腕組みし日の 長き日記かな
- 214 石をもて追はるる如く ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし
- 284 人ひとり得るに過ぎざる事をもて 大願とせし 若きあやまち
- 25 という歌があるが、これらの原作、または類歌が前期作品時代に見える。
- 69 なみだ涙その火の如き涙もてあらひし心戯けたくなりぬ（「スバル」一ノ五42・5）
- 69 不覚にも婚期を過ぎし妹の恋文めける文に泣きたり（同右）
- 浅草の凌雲閣にかけのぼり息がきれしに飛び下りかねき（同右）

大声にふるさと人をのしりて背に石うたれのがれ出でにき (41・7・23「明星」申八)

284 人ひとり得るに過ぎざる事をもて大願とするあやまちは好し (41・8・8「明星」申九)

この兩者をくらべてみると、傍線の部分で大いに異なっている。つまり、この傍線部がいろいろの意味で「暇ナ時」風なのである。明治四三年になると、この「暇ナ時」風はかなり改められていくけれど、やはり、若干、残存しているのである。たとえば、

34 高山のいただきに登り なにがなしに帽子をふりて 下り来しかな

という歌は、明治四三年五月一二日の「東京毎日新聞」に発表された歌で、後期の作であり、まさに『一握の砂』歌風の代表的なものである。この歌について、折口信夫博士は「当時、小説界における自然主義の運動がしづまって、その自然主義が文学の『地』になって来た時だった。啄木のこの歌もある点派手は派手だが、自然主義らしい注意ぶかい人の他には目にとまらない一瑣事をとらへたのだと、さういう風に解釈して、『一握の砂』では一二を争ふものだと考へてゐた。」(折口信夫全集第十四巻「短歌論」と評され、また、「昔の文学はかういふ平凡なことを歌の題材としなかったが、啄木は平凡なものを題材として、我々の氣持に触れしめた。これより人々は激情的な事を作るより、世の中の平凡なことを歌ふやうになった。啄木の亡くなった明治四五年前後から歌は変化して来たが、これはある部分まで啄木の力によるものである。(筆者要約)」（全集第二十五巻、「石川啄木から出て」と説明されている。まことに行き届いた評である。この評中「ある点派手は派手だが」と言っているのは、この第一二句の「高山のいただき

に登り」をさしているのかも知れないが、私はこの二句は、「なにがなしに帽子をふりて下り来しかな」という平凡な内容と詠み方に対して、大げさに感ずるのであって、そこに不調和を認めるのである。そして、この第一、二句は「暇ナ時」歌風の残存ではあるまいかと思う。実は、啄木は、この「高山の」の歌以前につぎのような歌を作っているのである。

鉄壁を攀ちて漸く頂上に上れる時に日は暮れにけり（41・6・24）

登りたる人なき山の絶頂に立ちて帽子をふれる人あり（41・7・16）

この二首を経ているがために、『一握の砂』歌風になっていながら、なお「暇ナ時」の歌風がこうして部分的に残っているのであると解する。

こう考えてみると、前期「暇ナ時」時代の考察を行なわなければ、歌集『一握の砂』について十分な理解を得がたいのではないかと考えさせられるのである。

一 「暇ナ時」時代の啄木短歌

1

啄木は、明治四一年四月末に母と妻子とを函館の友人宮崎郁雨に托して、単身上京した。そ

して、六月のはじめまで小説を書き続けたが、その五篇の小説は一向に金にならず、活字にもならない。小説によって生活し、母や妻子を東京に呼び寄せるつもりであったが、それどころか、自分ひとりの生活にさえ窮したのである。その六月一五日には川上眉山は自殺し、同じく二三日に国木田独歩は病死している。啄木は自信喪失、生活困窮とともに死を考えるようになり、自殺しようとしてさえている。そういう日夜の啄木の心をありのままに歌いあげたのが六月一四日に始まる歌稿ノート「暇ナ時」の歌である。

この「暇ナ時」について、窪川鶴次郎氏は「明星派浪漫主義の歌風の形骸にすぎないもの」と考え、『暇ナ時』のなかの、たとえば『東海の』や『頬につたふ』『己が名を』などの歌はまったく偶然に生れたものにすぎないことが『暇ナ時』ぜんたいを占める歌とくらべてみれば歴然としている。」と言ひ、「全体としては『暇ナ時』から『一握の砂』におさめられた歌は『暇ナ時』のなかでほとんどつながりをもっていない。」とされ、さらに『暇ナ時』のなかのとびぬけてすぐれた歌は、いわば作品としては偶然的なものであるが、それらの歌の内容そのものはまったく啄木の生活と人生にとって根ぶかい意味をもっていたのである。」と述べていられる。（近代文学鑑賞講座第八巻『石川啄木』）しかし、私は、その「偶然」とか「つながりをもっていない」という見方には従いがたいと思う。さらに、「啄木の生活と人生にとって根ぶかい意味をもっていた」のは「東海の」等の歌だけではなく、「暇ナ時」全体であると私は考えるのである。その「暇ナ時」全体からどうして「東海の」等の歌が生れたかを考えねばならぬと